

福音の園だより

【第十七号 二〇〇六年 五月 七日発行】

350・0016 埼玉県川越市木野目一八七八番地一

特定非営利活動法人 福音の園・埼玉 事務局

☎ 049・230・1111

FAX 049・230・1112

ご家族の声

初めてのようになり驚いたり笑ったりして

人は忘れることによって新たな感動を与えられるものなのかも知れない。母に会う度にそんな思いになる。私の顔を見てもすぐには名前が出て来ない。一日連続して顔を出しても前日会ったこととは憶えていない。姉が訪れ、三十分位の差で入れ違いに私が行った時には、もう姉と会ったことを忘れていた。自分の姉妹や夫(私の父)どころか両親(本人が今年九六才だというのに)が既に召されていることすら認識していない。

でも、それが日々の生活に差し障りがあるかというとなんか無く、会う度に(多少思い出すのに時間はかかるが)、「忙しいのに良く来てくれたねえ」と、久しぶりの邂逅のように喜んでくれる。前回話したことでも初めてのように驚いたり笑ったりする。父や知人、親戚など何年も前の死を聞いて吃驚する。つまり見聞きする全てが新しい情報なのだ。

「福音の園」にお世話になって約九ヶ月、健康状態は格段に良くなり、家に居た時には出来なかったことも出来るようになった。寝たきりに近かつ

た為、起き上がるのにも手助けが必要だったほど肥満していた体もスリムになり、寝起きも自分で出来るようになった。

規則正しい生活環境とグループホームという運営方式から与えられる色々な刺激、行き届いた「プロ」の介護のお蔭と感謝している。認知症特有の問題は多々あり、スタッフの方々の手をわずらわせてはいるが、母本人にとってみれば、既に召された自分の夫や両親姉妹、友人知人たちと共に平安に、そして日々新たな事柄に感動を覚えてつづかされているのだと思う。(T・K)

「思いつく故郷」を訪ねて

グループホーム福音の園・川越 ホーム長 杉澤 卓巳
先月、新潟市で開催された「第十九回新潟県都市緑化フェア」に足を運んだ。「NPO法人 土と風の舎」さんが会場内ブースに、当園での園芸療法活動事例をパネル展示下さっていたのだ。

途中、魚沼地方のある山村へ立ち寄った。Sさんの出身地をこの目で確かめ、Sさんのケアプランに反映させる目的だった。ご入居当時より回数は減ったものの玄関に立たれる。「Sさん、どちらまで？」不安そうな顔で「お父さんとお母さんが心配しているからツジマタまで帰るの」と繰り返される。これはいわゆる「帰宅願望」とは異なる。所帯を持って築いた夫氏と暮らした家ではなく、「うさぎ追いかの山、小鮎つりしかの山。いかにいます父母 夢はいまもめぐりて、忘れがたき故郷」と唄う生まれ故郷への郷愁である。けれども、故郷へお連れしたとしても解消されないであろう内心(魂)の不安を見据え、苦心するところに私たちの目指す「希望への支援の実践」がある。

ボランティアの声

心の安らぎの基

毎週金曜日・午前十一時からの「聖書の時間」。

その始まりと終わりに伴奏をさせていただいています。賛美歌は「慈しみ深き」を歌います。「大きな声で歌いましょう」と声を掛けますと、「あなたもしつかりピアノを弾いてよ」とお言葉を返して下さり、目の醒める思いです。

初めの頃は、認知症という利用者の皆様が聖書のお話をどのように聴かれるのか興味を持ちました。不思議なことに皆さん静かに耳を傾けて聴いておられます。絶妙のタイミングで相槌が返ることもあり、温かい笑いが溢れます。

福音の園の大きな特徴である「希望への支援の実践」は、人みな老いゆく中であって「心の安らぎの基」です。祈りつつ、そして喜んで皆様と共にひとときを過ごしております。(F・O)

理想の職場 福音の園・川越

病院などで働いてきましたが、忙しさの余り患者さんの話に耳を傾けてあげることが出来ず、心苦しく思い、将来は認知症のグループホームで利用者様の話を聴ける環境で働きたいと思っていました。ある日、インターネットのハローワークのページ。マウスを動かしていると埼玉で止まっていたしまい、福音の園・川越に目が止まる。ハローワークの職員が連絡下さり、「電話に出た方は、優しくとても感じのいい方でしたよ」と悩んでいる私の背中を押された感じがしました。働き始めて約二ヶ月。基本理念の「心に触れる優しい支援の実践」。私自身が皆様方から心に触れられ、心癒されております。(二階看護職・荒木ひとみ)